
種

岡谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
種

【Nコード】
N9237I

【作者名】
岡谷

【あらすじ】
愛する人が最期に残したものの、それは小さな『種』だった。いったいこの種は何なのか？
答えがわからぬまま、おれはその種を育てることにした。
しかし、それがすべての始まりだった…。

最期の贈り物

おれが病室に着いた時にはすでに貴子の心臓は止まっていた。

「慎一さんっ」

貴子の母は泣きながらおれへ駆け寄ってきた。

「お母さんっ、貴子は？」

「…ついさっき、息を引き取ったところなの」

貴子の母は流れ落ちてくる涙をハンカチで押さえながらそう言った。

「そ、そんな」

おれは全身の力が抜け、そのまま崩れ落ちそうになった。貴子が車に轢かれたと連絡をつけた時も同じように目の前が真っ暗になった。

貴子が横たわっているベッドへ近寄る。ベッドの中の貴子はいつもの貴子だった。死んでいるなんて思えなかった。

「犯人は？犯人は捕まっただんですか？」

おれのその言葉に貴子の母は黙って首を横に振った。

「ちくしょー！」

貴子を轢いた犯人はその場から逃走した。ぶつけようのない怒りがおれを苦しめた。

貴子と付き合いだして今年で六年になる。そして、おれも貴子も今年で二十九になるので、そろそろ結婚を考え始めていた時だった。

「…慎一さん。この種なんの種だかわかる？」

いきなり貴子の母はそう言って左手を差し出してきた。その手の中には二十個程の小さな種があった。もちろんまったく身に覚えがなかった。

「さあ、何なんですか？その種」

「さつき貴子が息を引き取った時に貴子の手の中からこぼれ落ちてきたの。気が付かなかったんだけど、あの子、ずっと握っていたらしいの。だからもしかしたら慎一さんへのプレゼントなんじゃないかと思っただけ」

貴子の母は自分の手の中にある小さな種をずっと見つめながら言った。

「あの子、その種おれがもらっていても良いですか？」

「ええ、いいわよ。きっと貴子も慎一さんにあげるつもりだったと思っから」

そしておれは、貴子の母からその種を受け取った。手の中のそれらを見つめながら種にまつわる思い出を思い出す。あれこれ考えたのだがやはりまったく身に覚えがなかった。それよりも他の貴子と

の思い出を思い出してしまい、自然と涙が溢れてきた。

その後しばらくの間、貴子の母と色々な話をした。話の途中、おれも貴子の母も気が付くとベッドの中の貴子を見つめていた。

「…それではまた」

貴子の母に別れの挨拶をしておれは病院を出た。外は真っ赤な夕日が眩しかった。

自宅に着いたが食欲はなかったので風呂だけ入った。シャワーを浴びていてもどうしても頭の中に貴子の顔が浮かぶ。

風呂から出るとベッドの上にバタツと倒れ込み寝つ転がった。ふと横を見ると壁に貼られた写真が目に入った。去年の夏に貴子と海に行った時のものだ。写真の中の貴子は笑顔だった。それを見ていると色々な思いがこみあげてきてまた涙が溢れてきた。

こんなに泣くなんて情けないよな。貴子に嫌われるかもな。おれは目をこすり涙を拭き取った。でもどうやらまだ涙は止まらないらしい。

お通夜

貴子、死んだんだ。

次の日の朝。目を覚ますと同時に失望感がおれを襲った。

今日も仕事はあるのだがさすがに今日は休もう。とてもこんな日に仕事なんて出来るはずがない。

おれは暗い気持ちのままベッドから降りた。ベッドから降りるとテーブルの上に散らばった数十粒の種が目に入った。

「…そっか」

結局、一夜明けてもこの種の正体は謎のままだった。しかし、これが何の種なのかは育ててみればわかることだ。

おれは午前中のうちに近くにあるホームセンターへと行き、土と植木鉢を購入した。植木鉢は何が育つのかまったくわからないのでとりあえず一番大きなサイズを買った。

家に帰り、早速買ってきた植木鉢に土を入れ種を一粒蒔いた。残りの種はりあえず窓際に置いてある収納棚の中に入れといた。

コップに水を入れ、それを植木鉢の中に撒いた。一体何が育つのだろうか…。

今日のお通夜は夕方からだ。それまで何をしていようか。こうし

て部屋で一人でいると寂しさのあまり気が狂いそうになる。

少しでも気分を晴らすために部屋のカーテンを開けた。外はあいにくの雨だった。余計に暗い気持ちになった。

*

会場に着くころには雨はますます激しさを増していた。

傘を差した喪服の人達がおれの前を通り過ぎていく。あらためて貴子が死んだのだと実感する。

「慎一君」

いきなり名前を呼ばれておれは驚いた。声の主は貴子の親友の加奈子だった。

「加奈子……」

「私、信じられないよ。貴子が死んじゃったなんて」

「……ああ。おれもだよ」

「加奈子、慎一君と結婚することすごい楽しみにしていたんだよ。それなのに……」

そう言うと加奈子は泣き出してしまった。泣きたいのはおれのほうなのだが先に泣かれると泣くにも泣けない。

……長い沈黙。嫌な空気になってしまった。おれは話の話題を考えた。

「……そうだ、加奈子。ちょっと聞きたいんだけど」

「なあに？」

「貴子がおかの種を買ったとか何かおれにプレゼントするとか聞いてないか？」

「…種？何も聞いてないよ。プレゼントするっていうのも聞いてないし…」

加奈子は涙をハンカチで拭きながら答える。

「そうか…」

やはり誰もあの種のことには知らないのか。

「何か、あったの？」

おれは加奈子に昨日あったことを話した。

「…不思議は話ね」

「一体何の種なのか全然わからないんだ」

「じゃ、あとで何が育ったのか教えて」

「うん…」

「それじゃ、わたし先に行っているね。慎一君も行こ」

「おれはまだここにいるよ」

「そう…。じゃまた会場で」

そう言って加奈子は会場へと向かって行った。おれはまた一人、雨の中立ちつくしていた。

黒い糸

お通夜が終わり家に帰った。

玄関のドアを開け家の中に入った途端、急に疲れが襲ってくる。リビングに行き、静まり返った部屋に音を入れるためテレビをつけた。テレビからはまた誰かが誰かを殺したというニュースが流れてきた。

普段あまり気にしないだけで、この世界には死が溢れかえっている。毎日、常に誰かが死んでいる。それがいつもたまたま自分ではないだけ。

おれはテレビのリモコンのスイッチを押してチャンネルを変えた。今度は人気お笑い芸人のグルメリポート。これで良い。リモコンをテーブルの上に置いてベッドの上に腰かける。ふと植木鉢のことが気になり横目で見ると。そしておれは驚いた。

「なんだこれ？」

なんと植木鉢から長さ十センチ程の細くて黒い糸のようなものが一本土から生えていたのだ。

おれはベッドの上から立ち上がり、植木鉢に近づいた。近くで見るとそれはまるで人間の髪の毛のようにも見えた。なにかの芽なのだろうか？でもこんな芽は見たことがない。

おれは一旦落ち着いて、しばらくの間色々と考えてみた。

本当にこいつは何なのだろうか？一応種から育ったのだから植物なのだろうか？しかしこんな植物見たことない。まあ、でも世界は広い。もしかしたら本か何かで調べればこいつの正体がわかるかもしれない。明日はお葬式だから明後日、ちようど土曜日だし図書館にでも行って調べてみよう。何かわかるかもしれない。

そんなことを考えながら目の前のそれを見ていたらいつの間にかおれは眠りに落ちていた。

*

次の日の朝は驚きと共に訪れた。なんと黒い糸が増えていたのだ。しかも長さも長くなっている。

最初はただ単に寝ぼけているだけかと思ったのだがそれは確かなことだった。

昨日は一本だった黒い糸が今日は七本。長さも十センチから二十五センチに、確実にそれは成長していた。

これは絶対に異常だ。たった一夜でこんなに成長するなんてどう考えてもおかしい。こんな植物があるわけない。

おれはだんだんとこいつの存在が恐ろしくなっていた。

*

土曜日。おれは予定通り図書館へ行った。

図書館は家の近所にあるのだが実際に中に入るのは初めてだった。中は割と綺麗でオシャレな造りになっていた。思ったより人も多い。

早速、案内板を見て植物のコーナーへ行き、それらしい本を三冊ほど選んだ。比較的人の少ない席を選び、最初の一冊を見てみた。

パラパラとページをめくっていくと見たことのない植物が多く登場するので、つい見入ってしまい目的を忘れそうになる。おまけにページ数が結構あるので一冊見るだけでも、だいぶ時間がかかってしまう。それでもなんとか持ってきた三冊には一通り目を通し終えた。しかし、あの変な植物のことはどの本にも載っていなかった。

その後、念のためにもう一冊見てみたがやはり結果は同じだった。

*

結局、何一つわからなかった。

おれはベッドの上に横になりながら、この部屋には不釣り合いな大きな植木鉢を見ていた。

どの本にも載っていないということは、こいつは新種の植物なのか？でももしそうだとしたら、なぜ貴子が持っていたんだ？貴子のお母さんの話だと貴子はこの種を死ぬ直前まで持っていたという。

貴子にとってこいつはそれほどまでに大事なものなのか？そもそもこいつは植物なのか？

色々と考えたあげく結局最後はいつもと同じひとつの疑問にたどり着く。

一体こいつは何なのだ？

半開きになっている窓から風が入ってきた。風に揺られるそれは、まるで海草のようだった。

どうせ明日になったらまたこいつはきつと成長しているのだろう。本数は増えて、長さも長くなっているのだろう。そしておれの予想通りこいつは次の日さらに成長していたのである。

親友

「結構、きれいにしているんだな。おれの部屋とは大違いだよ」

「お前の部屋が汚いだけだろ？」

今日は啓介が家に来ていた。

啓介とは中学からの仲でおれの一番の親友だ。昔はしょっちゅう二人で遊んでいたのだが、おれが地元を離れて東京に来てからは年に四、五回会うだけとなった。しかし、年に数回しか会わなくなってもおれと啓介の関係は変わらない。

そういえば、貴子が死んでから初めての来客だ。

「今日はありがとな。わざわざ来てくれて」

「何言ってるんだよ。おれのほうこそ、葬式に行けなくて悪かったな」

「大丈夫だよ。仕事忙しいんだろ？」

「うん……。でも本当にショックだったよ、貴子ちゃんが死んじゃうなんて……。前に一回だけ会ったことがあるだろ？会った瞬間にわかったよ。この子はすごい良い子だって。お前にはもったいないぐら이다よ」

「あはは……。そうかもしれないな」

しばらく沈黙が続く。

「…そうだ。そういえば昨日電話で話していた正体不明の植物ってのは何処にあるんだ？」

「ああ、あるよ。いきなりお前に見せるとビックリすると思ったからベランダに隠してあるんだ。今持ってくるよ」

おれはベランダに行き、隠してあったあの大きな植木鉢を部屋の中に戻した。かなりの重量があるので移動するのが大変だ。

「うわっ！何だそれ。本当に髪の毛じゃん」

啓介は驚きのあまりその場に立ちあがった。

「やっぱり髪の毛に見えるか？」

「ああ。髪の毛以外の何物でもないだろ？気色悪っ」

今日は種を蒔いてちょうど一週間が経った日だった。植木鉢の中のそれは毎日成長を繰り返して今では長さ五十センチに、本数に至ってはもはや数えることも出来ないほどになっていた。

「これが何なのかいくら調べても謎のままなんだ」

「そりゃわからないだろうな。だってこれ、絶対にこの世のものじゃないだろ？もうこれは怪奇現象だよ」

「怪奇現象ね…。あつ、悪い。ちょっとトイレに行ってくる」

「ん？ああ、わかった」

おれは啓介を残してトイレへと向かった。そして用を足しながら考えた。

一人で悩んでいても仕方ないので貴子の次に信頼できる啓介に見せたのだが果たしてあの謎の植物を啓介に見せて良かったのか？今になって後悔してきた。

なんだか最近変なのだ。

最初は重力に逆らって上に伸びていく髪の毛（もう髪の毛と呼んでしまおう）を不気味に思っていたのだが、いつからかその思いは消え、最近では逆に愛着が湧いてきたのである。なぜそのような気持ちになったのかはわからない。

おれはトイレの水を流し啓介のいる部屋へと戻った。部屋へ戻ると啓介が植木鉢の中の髪の毛に何かをしているのが目に入った。嫌な予感しかしなかった。

「啓介。何やっているんだ？」

「ああ、これどうなっているかと思っただけ。引っ張っているんだ。でもこれなかなか抜けないぞ」

その言葉を聞いた瞬間、おれの中の何かが切れた。

「それから離れるおおお！」

自分でもびっくりするような声を出しながら、おれは啓介に殴りかかった。

「痛っ！な、なにすんだよ」

「二度とこれに触るなああ！これはおれのものなんだああ！」

おれは何度も何度も床にうずくまっっている啓介を殴った。

その後のことはよく覚えてない。気が付くと玄関に一人でいた。拳がジンジンと痛んだので見ると血がついていた。

なんてことをしたんだ。すぐに啓介に電話をした。着信拒否。その後も状況は変わらなかった。

おれは貴子の次に一番の親友をも失った。

*

その日からおれはおかしくなった。

その髪の毛が愛おしくてたまらなかった。この前はなぜ愛着が湧いてきたのかわからないと言ったが実はわかっていた。隠さないと。言ってしまうおつ。

もしかしたらこの髪の毛は貴子のものではないのか？もしかしたらこの土の中には貴子がいるのではないか？そう思うようになっていたのだ。現実的に考えればあり得ない話なのだが、その思いは髪

の毛の成長と共に大きくなっていった。そしてその頃からその髪の毛を見ていると不思議と気分が楽になるようになっていた。心のもやもやが全てなくなりとても気分が良いのだ。

はじめは夜寝る前に数十分ほど見ていたのが数時間になり、気が付くと朝になっていたなんて日もざらにあった。休日は特に予定がなければ一日中見ている。そして、とうとう仕事も休みがちになっていった。

おれの生活は髪の毛を中心に回っていた。

種の正体

ある日、突然髪の毛の成長が止まった。

毎朝、成長しているのが当たり前だったのに急にその成長が止まったことにおれは戸惑いを覚えた。

こいつに何か起こったのか？おれの育て方が悪かったのか？それとも次の成長への予兆なのか？様々な思いが頭の中をよぎった。その日は会社を休み、一日中それを見ていた。しかし、特に変化はなかった。

その日の夜、夢の中に貴子が現れた。

貴子はとても悲しそうな顔をして部屋の隅に立っていた。よく見ると何処かを見つめているようだった。目線の先にはあの大きな植木鉢があった。おれがいくら呼びかけても貴子はピクリともせず、いつまでもじっとそれを見つめるのだった。

*

翌朝、目を覚ますと同時に自分が何をすれば良いのかを理解した。おれはベッドから降りると植木鉢の前に立った。

髪を触ってみる。髪は本物の髪の毛のような、さらっとした触り心地だった。いや、もうそんな回りくどい言い方はやめよう。これ

は、まさしく人間の髪の毛なのだ。それも貴子の髪の毛なのだ。

土の中で貴子は成長していたのだ。少しずつ、少しずつ成長していったのだ。そして昨日、その成長は止まった。つまり貴子は完成したのだ。

昨日の夢で貴子はとても悲しそうに、苦しそうな顔をしていた。そう、貴子は土の中から出たいのだ。貴子はそのことをおれに訴えていたのだ。

待っているよ。今、出してやるからな。

植木鉢の前にしゃがみこむと、おれは静かに、そして勢いよく手で土を掘っていった。たくさん床に土がこぼれたがそんなことはどうでも良かった。貴子に会える。それだけを考えていた。

だんだんと土が少なくなっていく、とうとう髪の毛の根元が見えてきた。見るからにそれは人間の頭だった。興奮が収まらないおれは一気に両手を植木鉢の奥まで突っ込んだ。そしてそれを掴み、ぐっと持ち上げた。

そして、自分の両手の中にあるそれを見たおれは驚いた。

土の中から出てきたものはまさに人間の生首だった。しかし、驚いたことにそれは貴子のものではなかった。

それは貴子の親友の加奈子の顔だった。

「な、なんで……」

土から出した瞬間にそれまで重力に逆らい上を向いていた髪の毛はバサッと下を向き、本来の髪の毛の姿へと戻った。

ずっと髪の毛の正体は貴子だと思っていたのが実は加奈子だったとわかり、おれはショックを隠しきれなかった。そして、すぐになぜ加奈子の顔が出てきたのかを考え始めた。

結論はすぐに出た。

おれは土で汚れた手を流しで洗い流し終わると、すぐに準備を始めた。そして十分後、おれは玄関を出た。

復讐

加奈子の家に着いたのは朝の七時前だった。おれの住んでいるマンションから車で15分のところにある。

加奈子はまだ実家に住んでいた。おれは携帯で加奈子を家の外に呼び出した。どうやら親はまだ寝ているらしい。しばらくして、まだ寝ぼけた顔をした加奈子のがそつと玄関から出てきた。

「どうしたの？こんな朝早く……」

おれは黙って加奈子の顔を見た。

「…慎一君？」

「お前だったんだな」

おれは一步ずつ加奈子に近寄っていった。

「えっ？なに？」

「どうしてなんだ？お前たちは友達じゃなかったのか？」

「待ってよ慎一君。何の事を言っているの？」

「とぼけるな！おれは知っているんだ」

加奈子との距離が二mほどになったときおれは立ち止まった。

「お前が貴子を殺したんだ」

「な、なに言っているの？」

加奈子は明らかに動揺していた。

「加奈子、車はどうした」

おれは車庫のほうを見ながら抑揚のない声で聞いた。

「えっ、あっ、あの、と、ともだちに貸しているの」

「嘘だ。貴子を轢いたときにできた凹みを直しているんだろ」

加奈子は今にも泣き出しそうな顔をしている。そして、

「……ごめんなさい」

突然、そう言って頭を下げた。

「やっぱりそうだったのか」

「でも待って。確かに貴子を轢いたのは認めるわ。でもわざとじゃないのよ。あれは事故だったの」

ケータイを見ながら運転していた加奈子は偶然にも、そのとき道端を歩いていた貴子を轢いてしまったらしい。

「なぜ逃げたりしたんだ。お前がすぐに助けていれば貴子は死なず

に済んだかもしれないのに」

「怖かったのよ。怖くて怖くて堪らなかったの」

いつの間にか加奈子の目からは大粒の涙がいくつもこぼれていた。

「本当にごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

何回も謝る加奈子をおれは冷たい目で見ていた。

「謝ったところで貴子は戻って来ないんだ」

「ちゃんと警察に行くわ。だから、だからお願い、許してっ」

「おれは絶対に許さない」

そう言っておれは手に持っていたバックの中からあるものを取り出した。

「きゃっ！な、なによそれ」

それは今日の朝、土の中から出てきた加奈子の生首だった。

加奈子はあまりの驚きに尻もちをついた。

「貴子もお前のことを憎んでいる」

そしてバックからもうひとつのものを取り出した。包丁だ。

「お前は貴子を殺したんだ」

おれは包丁で左手に持っている加奈子の顔の頬をなぞった。真っ赤な血がなぞった線にならって溢れ出た。

「きゃっ!」

見ると本物の加奈子の頬からもまったく同じように血が溢れ出ている。おれは自分の口元が自然と緩むのに気が付いた。

「やはりおれの思った通りだ」

「えっ?」

「この顔は偽物の顔なんかじゃないんだよ。本物の顔なんだ。わかるか加奈子?」

「わからないよ。ねえ、一体どうしちゃったの?なんか怖いよ。そんな気持悪い物まで用意してさ」

「だからこれは作り物なんかじゃないんだ!本物のお前の顔なんだ!」

未だに状況がわかっていない加奈子に対しおれは激しい苛立ちを覚えた。

「いいか?よく聞けよ!この顔とお前の顔は一心同体なんだ。だから片方の顔に傷が付けばもう片方の顔にも同じ傷が付くんだよ」

「だからもつわからないよ!」

「じゃあ、わからせてやるよ!」

そう言っておれは再び加奈子の頬に傷を付けた。今度はさっきよりももっと深い傷を。

「きゃ!痛い!」

「痛いだと?ふざけるな!貴子はもっと痛い思いをしたんだ!」

「なに?何なの?慎一君。お願い、やめて」

そんな加奈子の言葉を無視しておれは顔中に無数の傷を付けていった。

「いやああ、やめてえええ!」

必死に抵抗しようとしているのだが、極限のパニック状態に陥っている加奈子は立つことも出来なかった。

加奈子の顔は真っ赤に染まっていた。しかし、それだけではおれのこの思いは収まらなかった。きっと貴子も同じだろう。

「加奈子。お前のせいで今、貴子は何も見えないんだ」

おれはそう言うと包丁で加奈子の目玉を抉り取った。もちろん両方ともだ。本物の加奈子の目からも両方の目玉がこぼれ落ちる。

「あああああ!」

泣き叫ぶ加奈子は地面につずくまり必死に頭を抱えている。

「匂いも音も感じられない」

続けて鼻と耳を剃り落とす。もはや加奈子の顔は顔とは呼べなかつた。

「あああああ！」

「言葉すら話せない」

口の中からベロを引っ張り出し、それも断ち切った。

「っが、…っ、っげ…っが」

加奈子は虫の鳴き声のような気持ちの悪い声を出している。地面には真っ赤に染まった二人分の目玉と鼻と耳とベロが落ちていた。

そろそろ加奈子の声に気付いた親が出てくるだろう。その前に最後の罰を与えよう。

おれは真っ赤になった顔をおもむろに道路へと投げた。顔は少し転がり止まった。加奈子の家の前に停めてあった自分の車に乗り込みエンジンをかける。そして、少し車をバックさせると思い切りアクセルを踏み込んだ。すごい音とともに車は勢いよく、道路に転がっている顔へと突進し、ついにはそれを踏みつぶした。なんとも鈍い音がした。

バックをしてもう一度、加奈子の家の前まで戻った。加奈子はまだ動いていた。それはまるで頭を潰されたカエルのようだった。加

奈子のその姿を確認したおれは何とも言えない達成感に浸っていた。

*

あの種は貴子の思いから生まれたものだった。貴子が生きているときに味わった怒り、憎しみ、恨み。それらの負の思いが死ぬ直前に種となり現れたのだ。もちろんこれは誰に言われたわけでもなく、おれが勝手に推測したことだ。しかし、おれのこの考えは当たっているだろう。現に種の一つは貴子を殺した加奈子だったのだから。

自宅に着いたおれは、窓際に置いてある収納棚の引き出しを開けた。中には、種が二十個ほど入っていた。おれはその中の一つを取り出した。床にはまだ土が散らばったままだった。それらの土を再び植木鉢の中に戻す。

貴子、安心しな。おれが全部やってあげるからな。貴子が恨んでいるやつ全員におれが罰を与えてやるから。

たとえそれが誰であろうとも。

おれは手に持っていた種を土の中に植えた。

さあ、次はいつたい誰が育つのか…。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9237i/>

種

2010年10月11日23時29分発行